



高士  
然歸  
奇傳新話  
倭

^ 13  
3238  
45



13  
32384

へ 13  
3238  
4

奇傳新話卷之五

離魂為形中兵司全仇廉

君子齊懐と詭胎のまことすしむ世人の心と昏迷か  
さしむるにたのふり造化乃限あり世よ憂怪か  
や只其のふに慶とるれ邪正とてんるべし今昔とたえ  
ね足利満兼朝臣実東院領の財政事正しく稍世の  
中静ありと其比武彦國足立郡に中兵司とて  
々生ありえん来速武の比朝家れ侍居中兵通利とて  
ふ人のとてりれ過にくは地よた遷るべし勅免あり  
竟子民とあり多目ハ其孫あり一人の母子存ぶと此  
く容貌後藤にすて馬の術を達し希有の英才

平松町  
本  
山  
平

昭和十一年七月九日  
海味

奇傳新話卷之五

あり同敷子鳴井橋治とてり豪家の郷士のありて  
畑多く持郎ホ下敷子かきと二百人と美良く豊饒  
善しぬ子文治の系於將軍家に扈從一人の娘  
と陸子と名づく生れて西郷玉の如く風流女楊柳  
乃鳳子麗くおとく雲盤の落度成のなりけに似  
女業に達し一仍才甚正しく父母の志を鏡斜あり  
ど女又孝養を怠りりか一途困甚美廉とては  
て士農工商の年女おれと慕つたといふゆか  
善春の比橋治夫婦侍ひて野外と徜徉して  
観音と安をせし唐室にいらく休息ありて  
室の産補廣くして常に遊びの人乃定と止ん

と庭の泉の假山も自然と風景ありて人々  
息の地とあせり其日の客もかく橋治家内子  
間と借切妻とせしひて洒者走しかつた実子  
日乃貞子性情と善しぬ陸子の婢女一人と僕  
庭をと徘徊して築山と紙とてんれは二つ乃小室  
あり小庭又満洒たりは少中兵衛も野遊  
て一人あり休く極子産せり陸子これとん系  
眉目画のりがぶくある女年おれは情始くと死  
忍はめてたぐさきるに兵衛も風斗かつり  
瑤子が貞子神乃おとく仙のおとくありに惣神  
せ魂飛く思らば側子とてきて居て居て



かくだいごうりに言と棄して御めとるをば悔ると  
も悔りてうらたをぐりなきと討つべからぬその故  
わらんとあづめ屋敷陸子も家子ぬりて兵司候  
志願するのあらば密子母に詰りて自とて人子  
嫁せしめんとあつて同族の中長氏の婦とあつて生匠  
の志願を遂げだし一人と除く他子嫁せん自が志  
むふにあらばと云らるに母も其養育の情と云り  
して橋治子向て娘の志願と詰りきりに橋治候  
我兵司が人とありと誓して誓とせんといふ事  
久し高村豪家の子守多て我娘と連んと云  
司へ小家にしとお敵せざるお子似たり強くと云

あせんとせば親族中ぐてんせざる者多く豪家の  
子守恨と結ぶだ一我一の計ありと素と安ん  
さめ氏族とありめて我娘今歳年南十六日  
他子嫁せしめんと欲は云らるに同族他族の豪家  
是と云ふ者数多あり何事としと云らるる  
志願す天縁子任せて誓とあつて誓だし今我農  
家子進一と云ども々士と云く執事にも謂一軍  
役も命せざる志願す馬の道子進一人  
て誓とせば其恨と結ぶるあるべし  
も去例のれを屏風は画工と云く孔雀と云く  
又十間と隔くらと云く其服は射る人あり

聲とせんとさうめあそく其術とあつて要す  
一や中きりに親族一同にあきふ極の女に  
依姑乃恨と遊るるはよき知りありと  
て術く其方嫁めこれに連りられは術不待乃  
人の恥くとのつらう止其術とみて裁す  
不者只柳世首の二家のこありは沙汰と  
司大子悦びは是天幸あり某一案とは  
一と云れを母押止めて我仕方ありと  
り家よりつらく其書子對面一は夜ら  
を年君あつてのや一梓多目行年其  
の連り加つるゆと飛ぶとく小家に  
て尚家の

鏡と鳴一鼎子食の長老子對して其連申に  
もかときらるるに似たり故子さう  
と同小忌みかかんを胸襟と明  
述もるに橋治が書大子悦びく  
に御免と浮人の公あり其沙汰  
も公あつた志るに其公腹と  
れさえだ橋治とゆわきて  
事子成就せり某今家豪と  
の家の貧ありとつども其家系  
兵司の外子か一只依姑の恨  
みと殺り始も他子嫁するに  
と詰りなれば

千傳行吉集巻之六

五



新傳行古卷之六



新傳行古卷之六

五

母の天子よりさび地子悦んで深く舞く舞く  
其強と告るにき目たどりようして志就家に進せん  
と歡喜して其期と休居たり去程子唱あが家こ  
て日限とさあめ庭あに射場と播え八尺の屏風合  
地にして孔雀一羽と西しめ彩り玉玉格とそ一日に映  
して人の眼と射る書院子親族集り宴夜美と  
ほくは首首家れ一子ちる柳世氏の嫡子主馬あ  
人共の家喜家れ士あり何きも人お整併としく  
容貌とみぐさ衣裳美とあ一羽の好男あり未  
屋中兵司衣裳朴素にして容貌とかがうら  
浩く然としてあ士子進び望見其ありさぬ野鶴

の燕雀子對するに似たり答無事とく唱あけ  
氏族の禪門立出く回舞く物する射柳のさ  
ろと其多ひい君子なり二君次第とまき  
に御とあさるる一と園とわく一番とあつ二番と  
馬之番兵司と空りんを首首あつあ士に武  
礼して弓矢と携えそとあぐくと庭子りり其望  
にさう射礼と施し弓矢とほぐ引あててと  
射るに孔雀の肩と射後く目當たぐいぬれを赤  
面して望子ゆりぬ柳世主馬の公せして中庭に  
會釈もあく馳走く矢とほぐい志うやど  
りて切て放た子孔雀の首首より見お一同



に憐むと唱へれば柳世の言と首毛眼より  
くさすす難うかれごとく眼子ちうさごとくね  
ん大股今日の撰我あんと驕慢と坐れうさ  
きれを満座目さぬくあれと憎むぬ之番に中  
兵司御門より式礼とあつてあつてに庭おにり其場  
に臨み射礼とあつて手取て矢とはぐひ引あつた  
よりハ満月のおとく身辨押手務も巖石とあつて  
に似くあつてたのりつとこれとらあつた矢は流  
星れおとくを唱へて孔雀の眼一毫もたがらぬ射  
抜たれば満座満座の貴族も之ハ同音に唱へた  
てあつてくも止らざらんれば柳世主馬へ席また

満座の御座ぬ首毛をあらは兵司が花子三條して不  
測の妙術実子感嘆子のあまうりありあま門人とか  
て射術乃傳と受んると希ふ貴族れ撰子あつて難  
り事亦子増んや某一毫の恨悔かと精神と致し  
速りるに氏族も是と賞養一兵司も深く謝ては  
後足身の結びとあつて控弓馬の道と勵んと御  
したりあつて旅く兵司陸子が志願全く遂く是  
より橋治の舞と華屋の舞子よんく常に兵司  
陸家あつてて陸子と面のあつてり詞とくり附あ  
つてお別と互子公姥瓜そり婚姻乃附と侍居  
て好事必其るに陸磨と生れ其比の兵司芳賀

刑部と云ふ天性貪戻好色にして民家の令親と云ふ  
了取農商の妻子を類義及ある夫の物と云ふ  
奸婦一人民疎く憎くはるるが鳴井が娘陸子と云ふ  
美人あるものと云傳へて是と得んと欲するに射  
御と云く舞のさあまりたると云く太子妃と先中  
臣と云くとあるをたとして其上子陸子と我抑させ  
と云夫と云くもるに先比孔雀と射損たる柳世  
主馬幸ありとして密に秘司に端ひあさぐんを奸  
計と密使して中臣と云くを説く一え其宮方乃魁  
首にして人民と云くをさるるに在り一密に友軍と  
ト合を冥東に云く礼と云く其の企ありと新へ八方子

流云として唱へるに一大親子は色い方大形子吠  
て彼ふあはに吠鳴ありあり一く首をたつた子れ  
どもひいてさるるく兵司が方にありけりゆと云く  
来柳世が奸婦に云く秘司と密説してをも悉く追逐  
して圍秀と得るに邪謀ありと説くをれば兵司と  
太子れどもさ首を子ゆく射してその死由きて捕  
治子詰りに捕治が曰我も今朝これと云くややく  
け地と云く他處にあり居ふささ浦らば娘と云く  
とく送るべしと云股と説く母陸子も云く云く  
一れらるるを告ぐ陸子の産子たまりあはれ  
と云く云上りの熱眼眼穿して果へるぬ云目拘中

千傳新古集

権りおろくあれどもたわね辨はく鳴か夫婦子  
 悉と辨しとぬと告ぐ立海の母とて一雨に  
 退散せんとし子母思慮のつらけ一羽も早くさ  
 てをく逆久し連急せむかあは其身と失り  
 我身ハ入間那子申われをされ立裁く是と止む  
 近郷子のつら其動静と伺く母にまよとす  
 母子談論とすらめて兵司の上は子あはるつて  
 旅途子にきり案れおろく那司流云と坐て小吏  
 と集て兵司と捕えむらに疾退去せるより一  
 せんを大子収く鳴かか使と馳く始と逆之

りとまはるに橋治言て娘先比より大病に  
 困中にあむて人むとまらだまにゆく婚姻延  
 引せし不聲逐電とてゆかあれど娘病益重く志  
 て今に志しむらあはらんとやきれを使えりて  
 其旨伝新しきい虫子醫昨友人とせしとやうだ  
 いとんをむらに陸子の園中に外して心算あく  
 戒の空子相と書し戒の仲にそ偶諾とるに似  
 たり戒の笑ひ戒の泣あ醫もととるやうやく療  
 方れくそととる志子のあはれを空く立海の其  
 旨と速られ那司もせんうあく病疼るとして  
 時其やうとと伺りむは時同那子勇裁刺繡の

工に妙手と得たる寡婦ありて孝に鳴弁が教子傳  
ましく陸子そ子ありし其工作は増えりは寡婦一  
日ありて陸子が病間少くは力ありては地とさる  
の序に夫の中居氏と懇として病がふ其意憐  
なりまうれども中居氏互逆の沙汰ありて地とさる  
再びぬけりたぐりたえぬ多情の好男他郷に去  
てかあらず義人と撰て婦とあまざりまうれを  
の懇情何乃益ありん殊子嚴慈の二親令意  
一人のこ実子掌上の珠玉に論あり方は病慈  
にまうて論亡のうば二親乃悲哀何またとて  
暴ありとくども貴顯乃人ありは命にまうりて彼

嫁さば夫の容姿必麗一人子海とてかくれおとれ  
榮耀とまうりてまうりてまうりてまうりて  
書何ぞこれ子執るありん美那司の弟正と情む  
とあまざりて病子抱してまうりて  
那子聾とあまざりまうりて家豪の美男兒子嫁せん  
して地故と捨ふがまうりてあまざりて  
兼才藝を笑た子獨歩に故子教多の年少多し志  
まうりてまうりて今中居氏一人の  
にかくれおとれ病子神して天の寵異とみく受得  
ふ一笑百媚乃多ありてまうりて奸夫と美男  
の女子にありて茲人の職と得を悔くめりてあり

君の才明有識何ぞあつて情と絶するあつては  
 と深くと誦められれば佳子長嘆一歎して呼母のは云  
 何ぞさうぐらうと知りれ言あらんや自が去ると志さふ  
 何ぞ病婦の女子とひびくからん初は互にお慕ふの  
 情ありとさうも鑽穴論牆の律とちり父母子親て  
 て敬慈の命に後する彼と我と符節と合するら  
 おく試藝の場はく若少年に秀出しく孔雀乃  
 眼と射くあ家歡喜一若人其天縁と知りさうぐらう  
 貞と守りて死に誓ふく他は馳ぎるれ公兵目よく志  
 不のこあらば彼がさうぐらう或思ふ乃実公我より得  
 たり敬慈人情の毫毫あるさうのあつたれとも其公

へさうぐらうとちりて死に慶するを能くする事になを  
 好むとみくおんねなう父母乃公公のやうにま  
 ちさうぐらう病に妙に婦道なれわく開く事を且當  
 邪司のおとれ人面はく歎公何ぞ其位公全せん  
 久かたはして其家名を失ふべし呼母又おれ子婦は  
 も可ありとたさうぐらうと憐む子似く都て不義は  
 とくぐらうとたさうぐらうとと聖なるに道と依てよと  
 姑息とみく筋と矢ありむらうとた呼母にては  
 公の時の偏たる一邪の人皆さうぐらうと依く婦  
 と称せん嗚呼天ある武命ありと涙りるま  
 のさうぐらう床中に困おれれば寡婦も潜然とて

侯と僕一言以養とるるのあはれんとて退き去る  
るさるやぐれ兵司の一時乃登子丹山乃風風ワ  
死んく旅途の風系山河子野一と只産子ぐりあ  
るるるあく上野國より浪田の邊に旧僕の民  
とあつてなるとあつて争ね求めて其始末  
と結るに彼農丈夫子孫をそと即君かあはれ慈  
をかりあはれうらな某小地とくとも食糧とが  
かた公と安んト滞留あつて時節と結めんと貞  
固のりそあに兵司も公落つてと農夫が家の  
側子小室あつてあはれ彼徳理とあはれ是ととあ  
て日と書しせりが狗中須史も産子ぐり浮ました

とよみあく快くしてたの海どけ國乃人  
劉強乃と帯に殺伐と好む一郷の任使其中  
があつて信成幸とて武体と裁へると兵司これ  
幸あり彼亦伏後せば又手殿あつてととあ  
應善して撃劔力それ業と施し見よると皆凡  
庸不測の妙術あれを任使とも公服恭敬しと  
所とよびあはれ子後あつて他あつて其劉強の性伏  
よる亦によると実をそとあはれ又厚しかくれあ  
くして日月と送るる百日に及びきると一日中秋  
の夕を月訪ひ来る人もあつて秋色子野一と世と  
観し母の愁苦と悲しと我身の傍るあはれと悲

瑤子が病と傳へて其可哀いりあり彼是方す  
にせまり竟に双海襟と濕して伏あづこきるが  
えづりうる我とて其迷昏と慄慄一黄昏に及  
びて靡ととぞんと立出るに人足急にして其形  
いさざりてんぞれども婦人の足きりして同らうく  
馳あると時と定めておれとてるに瑤子にたがひ  
かたれば嬢子つらうをる兵司あれたありといふ  
きりけりておれとてり又是愛麻子あつたやと  
おととるありと啼泣するに兵司も怪しき喜んで  
傳へて肉子入り惣夫とてさういんがてはあふ来  
られしと背中と振うるに瑤子涙ととめは

あつた実の子にして夫君ちがひかゝらうりた  
りまうより悲泣するに二夜二日夫より人むと知  
りた昼の終日夜の毎青君子あつらうと奔走し幸  
若艱難と経るものとそ之耐しては父母に驚き  
ては食とあり食事をかゝり又眠るがおとく君乃  
側と離れど故子角所目子かふも又羞幻うとわ  
や一箇の那司乃奸悪ありえづりうる強得んとし  
先君と落し入る志うれもえづりうる病子神く醫  
師又奇病とて薬方とやうに幸に虎口と遁く  
たり迎來猶か糸ゆりく晝夜とつら病又と強  
まおれりゆりく父母一僕一婢とほきして密子自と

内書

西宮

宮

は地子ありし婢僕盤纏とむさろつて新別自と  
捨てて去るるころ道とまらば足子ゆりせておれた  
たり思らばとて若子多小豈天縁子あつたやと悲  
乃後云司と搦む兵司其貞節志操子感ト我今  
あに去るる生活又安一あつて夫婦は西に侍と  
古郷奸人の定る成徳一瑤子喜んて去るる時  
何と又愁んと其夜彼農夫子次女と語るに  
と打く奇縁あるうねと太子感喜一公と云  
奉仕するに夫婦も太子公と安んト兵司の任使の  
後と御と練一郷の穢雜と平夷一瑤子に徳裁  
と似く農夫と書と補く仍儀正一かりたれば

美男女兵司夫婦と名信して去る一貢乃ふに  
急一うたんとども若子父母にをれ一公と歴と  
ふゆあ一月の日は日とくそんは年々と春  
に及び春色閑に沈滯の間既一歳乃鳥兔と  
過せり初復子了りて入間郡の兵司が母は  
ありて夫婦子多小瑤子が志と感ト扱一も郡司  
芳賀刑部負逆暴政討あつて官額家より命下  
つて死罪子行れ新郡司長尾氏芳賀が邪と  
去るる法と悉くあつたをく柳世主馬が談言と  
て汝と退去せしめたるをわらわらして柳世も  
せしむ汝もりて次第還候一鳴弁にも行乃



あく息女とゆふ妻にべーと改法咽うりけり人々  
 大子よらんこび早く星夜あはべーと首夜あふより  
 中あるによらんく健ひゆんがためにあはれりと詰るんれ  
 兵司踊躍してよらんこび瑤子もよらんこぶとて共悲  
 不笑ありんれを兵司其故と同子瑤子涙かぐらえ  
 来らうらう父母の命と受た涙は糸と孕んとは息  
 と笑うる斗にけり婢女一人と召連くありね婢盤  
 纏とむさやうつく自然捨をうらだ丈夫子運なりね  
 けりと速を父母れ命と傳ぶるとすまゝめて必自然  
 止め並のあはれんとあらんく勿新あくもかりに修り  
 ちりや既成をんく悔あげさられを兵司が母をて

あくさめて私通の律と犯して好まると意とさるる乃  
 類子あはれ書とくく夫と慕ふ其志何ぞ憎ぶる  
 悔ひゆく其志と述べ嗚おあふ乃納得あらん中  
 銀かすといひらるに兵司も同むして瑤子あはれを  
 ことあへん申れ使あぬ人ありては中成あはれ何  
 とも力と落し今昨子別をく我く泰山の嶺と  
 先ふがあはれと志くれとも今度古くを信あはれ人る  
 の盛事あり志うるに師公猛しとて人ごとく婦人とは  
 ひて争丸乃世の強途を危し我く誓固して志る  
 だの方すて見送らならんともよ兵司その至  
 誠と感して志うらば辞退あくお入らるとよれた子

ありて立改へ間もあく五人旅途の用意と  
 驚きあつていひてお婦人と案せしめお後とあつて  
 中道へ出く武刃の強きつぐ鳩巢乃多之あれ  
 其地へ周章して其の外騒忙ありれば其司と  
 の中へ同よ新那司甚急思あつて改乃を正し  
 く齋司の悪政と急改つて民人實子父母の  
 急がぶと今日那司揃子出のよは齋司に刃ひ  
 らとて暴悪とあつたり去皆退逐せしめ  
 新那司と眼と野武士と諸しひて新那司と取  
 差つていひ沙汰していふは地よの人も人教と出え  
 諸に兵司をわけいふことありて情を好誠と

賢ある那司と打捕りと其義と急せしめ其勇  
 新那司の中兵司とあつて急は那中に居位と先  
 那司のため退りて他國に居居し今を位の高業  
 子と連なり我必新那司の危難とこといふ急し見  
 とあつて民人たよのろとんく安傳の邸に孔雀  
 の眼と射抜つる英雄あり急指揮あり行とつ然ん  
 だ人数百人斗とがり出れば母妻と村長と托し急  
 とたお子引連百人と引率して風揺と急さゆね  
 下糧食と刃ひ体息ありあく城危谷に切切あつた  
 下糧食と刃ひ体息ありあく城危谷に切切あつた

辞

怒りて打破しんとせんとせんと思ふ山登りてくたげ路とふ  
さだ只を矢子射とくめんとなし士卒等幕と打席と  
張りて暫時これと際ぐとくともせんくもていへん  
せんともしふに中居き司人教と卒と新那司乃恩  
命にゆりて中居兵司を住みたりして那司の急難  
と笑く海運ひはありたり一揆原早く退ぐと  
りりれを一揆の大おとぎつさ侍大音のむぎて推系  
あり詞くふ孔雀の服に射換どるとも汝が胸板に我  
拳れ肉まありと切て射た矢き目が眉間とすんで  
ありとも取れくかしくと笑ひぬい柳世もさるる  
より射撃へ悪くきりぬき悟せよと引詰くとも

と射る車に柳世り路中て脳を打けて倒さるれば  
一揆原肝と消し弊宗柳くふおと矢つぎ早に射り  
ける矢一むもあざ矢あくるんるぐるに十餘人枕とあ  
るく射教しをればらんとくもあき二回子迎わると  
五人の使たる百人の難卒退治く教十人と教傷か  
しをれをぬる奴原四角八方に迎去り射司の毒蛇  
の口はすなうれて大子悦喜あり兵司とをく招きて  
厚く褒賞あり又士難卒に悪言と下し不日に切  
と責せんと立悔りもる射士卒共仍路とあやまとい  
りあり並りあんとこれそれらも兵司進んて某  
師法と押くあるべと引さがり列と揃くとも

仍子熱人殺公と安んじて邸子海りて又高比子紀  
海ありて暇と終りて百人の卒と敗一又士氏親  
て母妻とあつて一め其牙い先首首首あつて家たつて  
つくを位の意と迷殿と深志の謝と謝えきるに  
首首天地子歎喜して座布人請トきりて今日立入  
て今日羽目猫場の愛集あり合々暗ひ多しを  
邸まで送りあれりて次身と詰りて首首首と叩  
ひて大工感喜一を位の初大功あり是吉兆あり  
井氏にきく夫兄と傳事早天の雲雷のおとく  
かぐく先ありて海りてのくといふも兵司も許諾  
てさうさく唱井が歌子仍く中兵兵司只今比夜の

を位子つとさありて中と若れれば橋治夫婦顛倒  
て馳出多取取て喜びびせんで言と吐りあつた  
兵司曰還佐の意にきく森内と使ひあつた道に  
新羽司の危難とよきひ是中であつたひあり  
と迷りれを橋治よりさびてはこと一附乃英雄  
ては切子すつと救日の活名もたのづらう晴れ  
娘陸子汝と別れさすより病子却て人りてさ  
花洋として心氣あつたさすくあつて日夜偶語さ  
とくくと言言つらつた初のおとくあつた  
及び志うれども耐く食事をあつた子すつと全  
びくくとも全快の初かると候と昔子詰りせんを

一傳行活美

兵司大子迷惑して其上に子ありて百餘日なく  
幸に瑤子某と慕ふてあり其子夫婦とありて一  
歳子近しは度母と其子侍ひありて兵司の妻によ  
つて鶴巢の馱子托し並より泰山乃慈恵とありて  
告げしをきられ罪と許し新物の候に其某が妻  
とありあり何の幸とされしと低低汗流  
一むらむらに乞われ橋治夫婦仰天して汝乃其の  
武功と笑み感嘆する唇も乾がりしを其  
のガクとて毎根の言と述のめや我娘の若菜のこく  
園中に却て彼ありありいんどをきくよみくきる  
と得んやよみ兵司もろかりてあやとされし

て奇怪と某疑ふ其ありしをいへる瑤子乃園  
中に入る其ありしと何んといふ橋治も公を  
女年多懐狐狸の類娘が形とありて是と迷せしも知  
だりしは兔角娘とありて其公と定めてむらに志  
と園中に侍ひてありて瑤子園中に依り眠る  
よとて西月容姿美の瑤子ありしを父母と其子  
急ぎて度布へ出某母と其子連れる瑤子いさありあ  
やしありありは地のゆと疑ひ能くあり今とあ  
る彼と是と疑ひすにありて其とも園中乃瑤  
子の始終父母の側あり一毫乃疑ふなきあり  
るれを侍ひあり瑤子妖怪なり何れも達人とに



一母と其子共々家へ居て居りて居るに偽たのづからりり  
 らんとしつゝ橘治夫婦も謀至極よりたら向ら  
 其妖怪と取さんと云目に自書と認させ教人と違  
 さ紙より尚家信作の老智識は常あり居るを  
 招きて右の報と請ひもるに左傍も怪しむる事  
 信疑をいふに某處に其怪と取さんと有れを  
 人も公けらつゝ兵司に湯とむを食のせ進め給  
 附鶴巢乃馱より中居家乃宅券ありのよと告れ  
 を兵司急ぎ立物と母と瑤子と使ひて座敷へ  
 に橘治夫婦とつと入るに向ら方あり瑤子あり  
 此の事と云れり詞か兵司母子瑤子が園中に

居ると私語れば母も疑無とてはと因ら瑤子父  
 母の前子お伏す事このさびき教子とむき余と  
 何卒沙慈と云く思免あつて永く中居家に箕  
 箒と取めめつと泣き泣くれば父母も胸中推し  
 不便と思くと我娘園中にあり黙止して互子面と見  
 合て給方居るるあり園中に抱音して立物人あり  
 づれも疑ふるに一歳病子伏する瑤子あつたに  
 知り父母慌忙と女抱して坐せしむるに二箇乃  
 子相対するに在毫もたがふ不かく友人喜笑満面  
 に溢れ互子とあり家と取く抱くがごとく入る

せらるが忽然として一癖とあり一人の陸子のころをり  
 横手と打て一座ち子駭きよやく蓋怪ききるに陸  
 子やせらるの自湯友人とあり其奇怪ぶくくとして  
 もあろくくつりあがらふよままとあつた思ふにら  
 か病子依くよるは恍惚として常は夫の側に在  
 るあるに実子室中と知く上及之仍其子夫婦とあり  
 て一歳子迫るる歴然として去れ又園中にある  
 くと時と食とあり父母と辞せしむもいさくもさる  
 ざらるりあり去れは病中に魂とありて形とありて夫  
 子後ひきるにやと述るるに何も解く安堵あり  
 まるに老僧の初より黙然として居たりしが何とて

て幾ひ人間の二公一界のせまるるふいうあり妙りもあ  
 どとていふあり是天縁あり庵去は法河乃張鑑  
 少のり人の娘と倩娘とふ王宙とつる者とあふ  
 て魂とありて形とあり子里とるて一王宙と  
 夫婦とありて教年れ後友人張鑑が家に来りて  
 倩娘の教年病子依く園中にあり夫婦のありと  
 笑く喜く馳出二人合葬して一人とあり永くさる  
 きるといふまにふく文人騷客其奇遇と唱へく  
 詩賦子述今日れるあまに刻合はまうて子孫繁栄  
 の徴あり去れはあやむく又怪しむる  
 不あり早く婚姻ありて好むと永く結ばれすと氷文

寺傳所古卷之六





うらとり那目ととらひしはた感賞ありて  
系那那軍家へ進せし不奏同ととげ勅勅免終  
あつて永く武家の被官たりとむむ天家より  
くお軍家よりあつて上世國子たわて二子貴  
の領知となすむむ余ありたれを兵司にまん  
で懇謝し不肖の某只お軍友領の慈恩にまん  
かくれおとく重恩と載さるる武門の眉目以上か  
や執事茲司に礼謝と速く一旦武門是之那目より  
彼地より采地に移りべしと取つて元立より先那司  
の邸子よりきれを那目出むくわんごんに契詞  
と速く由人申居も無恩と語りひと人那司乃吹

拳と謝して皆おが家に之をば氏族知音皆門外に  
むくい出く使ひ産布に毎りに母陸子いさうあり  
お夫婦親族一同に歡喜しとされより日毎に賀送  
と周ひて祝事とすくせり扱上りよりあつてひ  
る五士那目よりあつたままとのあつて申居が  
臨と云さるるに五士天地と詳してよりとび一同に  
其風しとんゆと喜しはあつて実を兵司も  
大子感喜しは又士と那司としてまより席等と求  
むに日夜望まきある者多く半月餅子して人教  
全くとらひる故唱お夫婦子限あつて大慈成謝  
一母陸子と使ひて領知子入く敏と播へ家士とを

げまう百姓とあわれむ改まふかりきれを人民あり  
 こころがひ目出度受きりとあん唱呼奇怪に邪  
 正のりけ怪ふとせんうあうぐくく不思儀ありし  
 其ありの 倉平

奇傳新話卷之五終



根那州	風志道軒傳	勇士烈婦奇傳新話	柏掌奇談	寒温奇談	新編女物傳	い海はあ板傳	川霧一代記
全五冊	全五冊	全六冊	全五冊	全五冊	全五冊	全	全
通俗醒世恒言	瀧本三十六奇仙	女世以又卷圖	夢合延壽大成	狂母寶合記	狂母二紫州	東都江戸橋四日市	書肆上總屋利女衛
全九冊	全	全	全	全三冊	全		

大正一〇年

